

主役は舞台にあがれない

保坂 凧砂

一瞬であったようにも思えるし、何年もそこにいたような気もする。私は時々、一年前の夏のこと——夜の学校のことを思い出すようになった。その時間は今でも私の中に、とても大きな意味を持って存在している。

「先輩！里先輩！あと二分で大道具班入ります！」

「わかった！」

後輩の声に弾かれるようにして立ち上がった私は、改めて、鏡に映る自分の姿を見た。いつもの私とはまるで違う。いままでずっと長かった髪は、一昨日ショートカットになった。ワックスで整えられ、ツヤツヤと光を放つ。目を切れ長にするアイメイクと合わさって、私を私ではなくしている。

自分の心臓の音が耳元で、大きく聞こえる。

緊張している場合ではない。私は深く息を吸って、肩にのせた力をトン、と落とした。

「せっかくの、私だけの役なんだから」

騒がしい楽屋に小さく独り言を混ぜてみる。私の声や緊張は、きっとみんなには伝わっていないはずだ。

青色の紳士服を両手でピンと伸ばし、力強く微笑んでから、私は舞台の方へ駆けた。

○

はっとして、私は咄嗟に周囲を見回した。そこに在るのは慣れ親しんだ学校の廊下だが、いつもより薄暗く、人は誰もいないようだった。音が、全くしない。ただ窓の外の白い満月のようなものが、冷たく廊下を照らしていた。床に落ちた私の影はとてもはっきりと置いて、いささか月が明るすぎるような気がした。

ぼうっとしていていつの間にもやら夜になってしまった、なんてことはないだろうと思いつながら、恐る恐る目の前の教室を覗いてみる。

時計は、五時手前を指していた。しばらく眺めていると、カチツという音を立てて、針が進んだ。やっぱりおかしい。最後に確認した時は四時半だった。四時半であんなに明るかったのが、ほんの数十分でこんなに真っ暗になるはずがない。人だってまだ残っている時間帯だ。

頭の奥でピーっと耳鳴りがした。不安を煽ってくる静けさに負けじと、お腹から声を出してみる。

「——私は部活のため、学校の廊下を、友人二人と移動していた。ただ、明るい恋バナをする二人と並んで歩くのが、だんだんきつくなって、私は脱落したみたいとその後ろについて、歩いていて、はずだった……」

演劇部で培った芯のある声が、校舎に反響し、自分の中の声と混ざって、頭に響く。気持ち悪い。やっぱり私は自分の声が嫌いだ。

ここには現実味がないから、おそらく夢か何かだと思う。もしかしたら、明晰夢かもしれない。

ただ、夢だとしても、一人になるといふことを考え始めてしまうから、嫌だった。特にここは、液体に浸かったような、半透明の空気を持っている気がする。そのせいか、なんとなく息苦しい。これは私が考え事をするときに流れる空気に似ているのだ。

私は廊下の柱にもたれかかったまま、ずるずると床に座りこんで膝を抱えた。

「——どうしょ」

そう呟いたそのとき、視線の先にあつた空き教室の電気がパッとついて、オレンジ色に光った。あまりの明るさに目を細める。続けて、音を立てて開いた引き戸から、ネコのような顔と、ウサギのような耳と、ヒトの下半身を組み合わせた不思議な生物が出てきた。

私は思わず立ち上がって、それを見つめた。オレンジの光に包まれて、シルエットが浮かび上がる。トントんと、軽やかな革靴の音とともに、こちらに歩いてくる。ぬいぐるみのようなその容姿と、特徴的なシルクハットには見覚えがあつた。

「リドネ伯爵……？」

「その通りだ、里クン」

自分の名前を呼ばれて、ドッと心臓が跳ねた。声はやや低めの、普通の人の声だった。その喋りぶりも、キラキラ光る大きな目も、演劇部でやるはずだった台本『伯爵の城』の主人公そのものだった。部員たちと作成したイメージ図を、そのまま現実起こしてみたみたいだ。そういえばリドネ伯爵も、夜に生きている設定だった。ということは、ここは伯爵の城なのだろうか？

私が呆気にとられて動けないでいる間も、なぜか伯爵は悠然として外を眺めていた。

「伯爵」

私と呼びかけると、伯爵はこちらを一瞥して「おいで」と言い、廊下を歩き出した。私は伯爵から目が離せぬまま、その後が続いた。明かりのついた部屋は、伯爵がその前を通り過ぎた途端に電気が消え、静まり返った。

「あの、ここはどこでしょうか」

「夜だ。もしくは舞台裏だろうか。ここは、頼れるヒトがいなくて、倒れそうになっているヒトを救うための夜だが、実際そんなヒトはいない。誰にだって味方はいないからだ」

ポツポツと間を置きながら、伯爵は詩を詠うように、ゆっくり答えた。この空気にのまれて、私の中の不安や恐怖はいつのまにか消え去っていた。それに変わるように、次々に不思議が浮かぶ。私には別に、頼ろうと思えば頼る人はいる。5 W 1 H、どこ、いつ、なぜ……？

「……でも人は、頼れる人がいても、頼れないものだと思います」

「だから我々、夜の案内人は無意味なのだ。ヒトは来ないのだから、需要がない」

「じゃあ、なぜ私はここにいますか」

「私の鼻頂だ」

「伯爵はなぜここに？」

「……死んだからか」

「……」

確かにあの台本はダメになったから、もうこの容姿の伯爵は存在しない。

「どこに向かうのですか」

その質問で、伯爵はピタリと足を止めた。

「演劇部の部室だ」

くるりと振り返って私を見上げ、伯爵は言った。私の手は緊張のせい、ひどく冷たくなっている。

「……そうですか」

必死に声を絞り出して答えると、伯爵はまた歩き出した。そしてまた唐突に、こちらを振り返った。後ずさりそうになるのを、ぐっと堪える。

「里クンはなぜ元気がない？」

元気がないと言い当てられるほど、外見にそれが表れてしまっているのかとショックを受けたが、多分伯爵は全てお見通しなんだろうと思いついた。こんな場所だし、なにせリドネ伯爵だ。台本の中のように、魔法が使えてもおかしくない。

私は言う事を考えてから、落ち着いて話すような心がけて、言った。

「……尊敬していた先輩を失ったからですかね。もう、半年経って、だいぶ落ち着いたけど、今度は先輩が忘れられてくのが嫌になって……前みたく明るく出来なくなりました。前みたくなかったら、私も先輩を風化させていくのに、加担することになる。だから、元気に見えないのかもしれない」

「……そうか」

沈黙が流れて、校舎には足音だけが響いた。

「その先輩は、君が忘れないでいるだけで、消えたりすることはない。だからもういいんじゃないか」

伯爵は沈黙を破って、どこかで聞いたようなことを口にした。

「——みんな、そう言うんです」

リドネ伯爵なら、この気持ちのやり場を教えてください、とどこか期待していた私は、少し悲しかった。伯爵は水木先輩の作ったキャラクターだからか、一人称こそ『私』と『僕』で違うものの、口調が水木先輩じみている。

水木先輩は少し変わっていたし、めったに感情は出さなかったけれど、いつも冷静で、言うことは真つ直ぐで、正確だった。(私みたいに、すぐ人に流されるようなことはなかった。)だから部員のみんなからも慕われていたのだ。私は水木先輩の言葉に、幾度となく救われてきた。私はそれに少し依存しすぎるくらいであった。

「里ケン？」

私はいつのまにか足を止めてしまっていたらしい。少し先で止まって、こちらを見つめる伯爵の顔からは、表情が読み取れない。動物だから、当たり前だ。でもこれが、台本がダメになった一つの原因だった。上が被り物では演劇ができない。

「……伯爵、もう少しだけ、話してもいいですか」

「もちろん」

伯爵は口を、人間のよう滑らかに動かして言った。水木先輩にとってはこれが理想だったのだろう。作り変えなんて、したくなかったのかもしれない。

「……その先輩は事故死でした。ボツになった自作の台本を作り変えて、わざわざ私に見せに来てくれる途中の事故、だったみたいです。……私が書き換えを提案したせいです。『伯爵の顔は人、体は動物って話に変えよう、先輩の台本をボツにするのは嫌だ』って、言って。葬儀の時に受け取った台本の表紙には、『よくない』って、先輩の字で付箋がついてました」

『命と引き換えだ』とでも言うように渡された台本は、水木先輩にとっても、ボツの方が良かったものらしかった。

私は台本を受け取って、かえって絶望した。この台本に、命と等しい価値は絶対がない。どんな内容でもそれは変わらない。でも、『よくない』台本のためだけに水木先輩は痛い思いをして死んだのか、と考えてしまう。

「私は、君の提案通りの体や顔も、いいと思うぞ」

そう言いながら、伯爵は胸ポケットからハンカチを抜いて差し出した。抑えられなかった涙は、頬を伝っていつてしまっていた。

「ありがとうございます……」

長い間留めておいたものを吐き出してしまったせい、胸に穴が空いたような気がした。もしかしたらこれが、心が軽くなるというものかもしれない。

そもそも、台本を書き換えようなんて提案したのは私だったのだ。私があんな事言わなかったら、先輩は死んでなかった。誰かに謝りたくてたまらなくなったけれど、言い出せなかった。もうみんな忘れてしまっているだろうと思うし、覚えていてもあえて口に出したりする人はいない。

それなのに、みんなに責められはしないか、水木先輩は私を恨んでいないかと怖くなる自分が情けない。結局自分のことばかりじゃないか。自分のことが可愛くて、言い出せないんじゃないか。

このモヤモヤを抱えたまま半年経って、部員のみんなは前に進み始めた。書き換えの台本で、舞台を作り始めているのだ。そしてその主役を、私は勧められていた。みんなは私を信頼してくれている。

私は私が惨めで嫌なやつに思えて、何も考えたくなくなった。そして結局、水木先輩に会いたくなる。水木先輩ならこのモヤモヤを一掃してくれると思ってしまう。『自分で先輩を殺したくせに！』と叫ぶ声が脳内に響く。この頃から、自分の声が嫌いでもうなくなっ

た。

書き換えの台本は、実はまだ開けていなかった。付箋の言葉と、みんなが泣きながら読むのに、怖気付いたせいだった。きっと冷静ではいられなくなる。

水木先輩の台本はいつも本当に面白かった。脚本だけじゃなく、演出や照明音響まで考えてあって、舞台をイメージしやすい。部長もこなして、脚本も書いて、その上演技もうまい。

この学校の演劇部はそこそこの名門と言われていることもあり、水木先輩は外の注目を浴びることも多かったと聞く。本人は気づいていたのか分からないが、校内にはファンクラブまであったらしい。どうりで、バレンタインデーの荷物が多いはずだった。

——里は、僕にはない演技や声を持つてる。

その先輩が私を認めてくれていたのは、私の人生において本当に奇跡だった。

当時、飛び跳ねるほど嬉しかったはずのその言葉は、今になって、私の首を絞めている。私は水木先輩の代わりになれないということを、改めて思い知らされるからだ。

「里クン」

「え？」

「里クン、入らないのか」

「あ、いえ、すみません」

いつのまにか、私たちは部室の前まで来ていた。誰が作ったのか分からない、『演劇部』と書かれた木の看板が、ドアノブにかかっている。伯爵がドアノブに手をかけると、自然と中の蛍光灯がついた。いつもの埃っぽいにおいに、肩の緊張が解ける。伯爵は、ずんずんと奥に進み、大道具の木棚から慣れた手つきでクリアファイルを取り出した。

「それ……」

伯爵が手にしていたのは、水木先輩が最初に書いた『伯爵の城』だった。こんなところにしてしまっていたなんて知らなかった。

台本を見つめる伯爵に、私はまた、先輩を重ねてしまった。水木先輩は、女子としては背の高い私より、頭一つ分背が高かった。だからか、天井の低い部室ではいつも椅子に座っていた。朝も、部活のない放課後もここにいた。たぶん、誰よりも長くここにいた。

ふだんあまり感情を出さず、口数も少なかった水木先輩だが、舞台上に上がると突然、人を変えた。台詞に、役柄に合わせて表情を自在に動かし、時には感情的な役までこなしてみせた。取り憑かれてみたいよね、と友人は言った。私は、本当にその通りだと思った。あれは間違いなく才能だった。

先輩なら、リドネ伯爵をどう演じただろう？

ふと顔を上げると、伯爵は悩むような格好で台本を見つめていた。

私と目が合うと、台本を無作為にめくりながら言った。

「……里クンは、次の公演で私を演じる気はないのか」

「……元々は先輩の役だったから、私なんかじゃダメなんです。それに私、もう演者にはなれないと思う……」

仲間たちはやってみなよと言ってくれている。でも、水木先輩の役が、先輩の作ったキャラクターが、こんな声のこんなヤツではしょうがないのだ。

私が俯いて、何も言わないでいると、伯爵は大道具の机にパサッと台本を放ち、軽くため息をついた。

さらに伯爵は、広がった台本の上にドン、と手をついた。伯爵らしくない行動に驚いて、私は思わず目を見張った。

「伯爵……？」

「もつたいない」

「え……？」

バツサリと言い切った伯爵の表情は、全く動かないのになぜか苦しげにも、怒っているようにも見えた。

「もつたいない。里クンがやらなくてどうする。その先輩だって、自分のせいで里クンが演者になれなくなったと知ったら、悲しむぞ」

「だんだんと、伯爵の言葉は強く早くなっていく。」

「でも……」

「里クンほどうい声の持ち主に、私は出会ったことがないぞ。こんなに慕ってくれた後輩を、先輩が恨むわけなからう。君は何も悪くないさ。第一、その先輩は君の演技を評価していたじゃないか。誰よりも素直で、難しい役柄にもはまることができる。里クン、君は書き換えの台本をよく読まなかったら。難しい台本になるけど、里ならできると思ったから。だから僕は台本を書き換えたのに」

徐々に伯爵の姿が薄れていく。

『『よくない』じゃなくて『よくない？』だ。ちゃんと見てみる、ばか。僕はちゃんと書き上げたぞ。この役は、もう里だけのものだ。里にしかできない』

伯爵のいた場所に緩やかに、浮かび上がるようにして現れ、そう言い放ったのは水木先輩だった。水木先輩は、ひどい顔で泣きじゃくる私の頭をポンポンとたたき、それからゆっくりしやがみこんで言った。

「里、ありがと」

「先輩……？」

涙でぼやけてしまわないように、私は必死に涙を拭う。

「僕はおかげで最後の演技ができました。リドネができて楽しかった」

そう言って笑った水木先輩の綺麗な瞳に、涙が溜まっているのがわかった。この人が演技以外で泣くところを初めて見る。水木先輩は私の前髪をくしゃっと親指で上に持ち上げると、力強く微笑んで言った。

「じゃ、あと、頼む。僕はここで見ている」

水木先輩が手を離れたのと同時に、世界が暗転して、私は夜が舞台裏だったことによく気がついた。伯爵——水木先輩は、確かに、舞台裏にいてくれるのだ。台本として、夜と

して、いつだって存在する。消えたりしない。

舞台セットが回転してステージに出るみたいにして、私は夜を離れていく。目の前がだんだん、白く、明るい光に満たされてゆく。

私は、水木先輩のくれた役がやりたい。里なら、と任せてくれた役をやりたい！早く台本が読みたい！

きゅつと目を閉じて、私は強く思った。

○

公演後の楽屋は、スタッフ陣、出演者からOBやOGの先輩方まで、人で溢れかえっていた。

「里せんぱーい！すごかったです！絶対優秀賞取れますっ！」

「ありがとう」

「里ちゃん、やっぱはまり役だったじゃん、リドネ。最初の台本でやるより、全然よかったと思うよ。流石水木だなんてかんじ」

「——ありがとうございます」

メイクを落とし、衣装を着替えた私は、未だに興奮の冷めない楽屋を見渡した。お互いに労いあう者、感動のあまりに泣く者、それぞれが舞台の成功を喜んでいた。

そんな中、水木先輩の写真は大道具の上に、ちんまりと飾られていた。額の中の水木先輩は、うつすらと笑っている。差し入れのお菓子や飲み物が前にたくさん並べられている。きゅつと誰かが置いてくれたのだろう。

（見てますか、先輩。これ全部、先輩が作ったんですね……）

きゅつとどこかで見てるんだろうな、と思いつつながら、私はぎゅつと抱きしめた。

『リドネ、変更。里ならできる』と、水木先輩の字で書かれた台本を。